

聖書箇所：ルカの福音書 8章 26～39 節

説教題：苦しむ者とともに

### 1 イエスは失敗したのか

ここに異様な姿をした男性が登場します。普段こんな人に出会うことはありませんから、実感としてとらえることは難しいかもしれません。

もう三十年前になりますが、マザーテレサが働いていたことで有名なコルカタという町に旅行したことがあります。行く前からその町は、「障がい者のデパート」と言われていることは聞いておりました。実際にそのとおりでした。一歩路地の中に入っていくと、強烈な悪臭とともに、これが人間かと目をそむけたくするような光景を目にし、衝撃を受けたことがありました。そのなかには悪霊につかれた人がいたかどうかはわかりません。でも、この男性と同じような境遇のなかで苦しんでいる人たちが世界に沢山いる、そのことは実感しました。

ここを読むとまず、悪霊の乗り移った豚がおぼれ死ぬということが強く印象づけられます。そのためか、ゲラサ地方の人たちのことを考えることは少なかったかもしれません。きょうは、この人たちに目を留め、神のみわざがここでどのように行われていたのかを見て参ります。

地元の人たちがどの反応したかは、34 節から 37 節にあります。「飼っていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこのことを告げ知らせた。人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、

正気に返って、すわっていた。人々は恐ろしくなった。目撃者たちは、悪霊につかれていた人の救われた次第を、その人々に知らせた。ゲラサ地方の民衆はみな、すっかりおびえたしまい、イエスに自分たちのところから離れていただきたいと願った。そこで、イエスは舟に乗って帰られた。」

ある方はこの人たちのことをこう説明します。「せっかくひとりの人が救われたのに、そのことを喜ぼうともしない人たち。自分の飼っていた豚が死に財産を失ったことに心を奪われて、損得勘定でイエスを追い出す人たち。」

確かにそんなふうに見えます。しかし、どうでしょうか。もし自分が豚を飼っている人だったとします。あるときイエスという男が湖の向こうからやって来て、いきなり豚を台無しにしてしまうのです。それも、見てはいけないものを見てしまったかのような異様な方法です。いまなら、「弁償しろ」と訴えられてもおかしくない話です。地元の人たちの立場に立てば、イエスに対し「これ以上やっかいごとは起こさないで、はやく帰ってくれ」と言いたくなる気持ちは理解できます。おびえるのは当然です。

そうなると、疑問が湧いていきます。イエスはもっと賢く立ち回れなかったのか。例えばこうです。悪霊が、「あの豚に入ることを許してください」とイエスに許可を求めてきたときです。もしここでイエスが、「豚を殺したら持ち主に迷惑が分かるし、びっくりさ

せることになるから」と断り、もっと別の方法を提案していればこんな大騒動にはならず、イエスへの好感度も上がったことでしょう。それなのに、イエスは豚の持ち主が大損害を被るようなことを許してしまい、人々を驚かせてしまった。これは大失敗です。

その結果、イエスは、悪霊につかれたひとりの男性を救うことはできたが、地元の人たちは誰ひとり救えない。すくすく引き返さざるを得なかった。悪霊はイエスを邪魔するために、あえて豚に乗り移ろうとしたのかもしれない。もしそうなら、悪魔の思うつぼです。

本当にそうなのでしょうか。悪霊を追い出すほどの力と権威を持っておられる神の子イエス・キリストです。そんな方が、敗北して帰らなければならなかったというのでしょうか。

## 2 イエスに出会う

### (1) 男がイエスに出会った

もういちど、イエスがどのようにしてこの男を救っていたのかを確認します。27 節前半を読みます。「イエスが陸に上がられると、この町の者で悪霊につかれている男がイエスに出会った。」

男のほうから積極的に、イエスのほうに出向き、イエスに会った。そう書かれています。なぜ近づいていったのか。そのことはちょっと複雑です。というのは28 節にこうあるからです。「いと高き神の子、イエスさま。いつたい私に何をしようというのです。お願いします。どうか私を苦しめないでください。」

イエスを見た悪霊が、なんとか悪いことにならないようにイエスに願います。そういう目的をもってイエスのほうに出向いてい

きました。

この男が、自分の心で救われたいと考え、それでイエスのもとに来た、ということではない。ひとことでまとめれば、この男は自分の意志ではなく、悪霊によってイエスの所へ連れて来られた。その結果、救われた。よく考えるとなんとも不思議です。

私たちは悪霊と聞くと、神の救いのみわざを妨害し、私たちを救いから遠ざける存在、そんなふうを考えていたかと思います。確かに悪霊はそのような働きをします。しかし、だからと言って神の救いの計画が邪魔され、計画変更を余儀なくされたとか、台無しになるとか、そういうことでは決してない。神は、悪霊の働きを逆手にとって、それを巧みに利用し、計画通りに人を救いに導く。そんなお方なのです。

### (2) 人々はイエスのそばに来た

これに対し、地元の人たちはどう反応したか。細かく見ます。35 節。「人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来た。」先ほど、男がイエスに出会ったと言いました。ゲラサの人々もイエスのそばにやってきたのです。その目的はさまざまです。悪霊につかれていた男のことを見たい。豚の群れが湖でおぼれ死んだことを確かめるため。大事件を巻き起こした張本人イエスを見るため。ようは好奇心です。それでも、イエスのそばに来たことは事実です。

前々回の説教で、弟子たちが大嵐の中で舟が沈みそうになったとき、イエスをたたき起こすためにイエスに近寄っていったところを見ました。イエスに怒りとぶつけるために弟子たちはイエスの所に行く。実は、イエスはその瞬間を待っておられ、どんな目的であ

れ、イエスに近づく者に、イエスは信仰を与えるお方であることを見ました。

ここはどうなのでしょう。あまりにも頑なな人々だったので救うことをあきらめ、心を痛め、舟に乗って帰られたのでしょうか。そうではありません。ここでも原則は変わらない。イエスはご自分に近づく者へ信仰を与えて行きます。では、いったいどうやって人々を救っていくのでしょうか。

### 3 神の救い

#### (1) イエスと共に行くことはできない

38 節以降のやりとりのなかにヒントがあります。いっしょにお供をさせてくださいと願う男に対し、イエスはこうっております。39 節。「家に帰って、神が神にどんな事をしてくださったかを、話して聞かせなさい。」

イエスは、なぜいっしょに来ることを拒んだのでしょうか。男の願いを直訳すればこうなります。「私はずっとあなたといっしょにいたい。」男は気がついていませんが、イエスには、大変重いことばに聞こえるのです。「あなたの十字架までいっしょについていきたい。」そんな意味になってしまうからです。でも、十字架はイエスお一人だけがおかかりになる場所。私たち人間がつくべきところではない。だからイエスは優しく諭すように言われました。「あなたの家に帰りなさい。」

#### (2) 救われた者の口を通して語られる

このあと男は、イエスが自分にどんな大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めていきます。39 節のイエスのことばと、この男がその後何を語ったか、よく見比べてください。イエスはこう言いました。「神があなたにどんな大きなことをしたか。」いっ

ぼう男が話したのは、「イエスが自分にどんな大きなことをしたか」です。よく見比べると一箇所だけ違います。イエスは「神が」と言い、男は「イエスが」と言っています。つまりこの男は町中で、「イエスこそ神である」と証ししていったことになります。

#### (3) 種が蒔かれ、やがて実を結んでいく

最後に結論を述べます。イエスは、ゲラサ人の地方の人たちのことを救えなかったのか、それとも救っていったのか。イエスは悪霊につかれたひとりの男だけを救ったのではありません。ひとりの救われた男の口を通して救いのみことばが蒔かれているではありませんか。

この場面では、イエスを拒む頑なな人々に見え、悪い地に種が蒔かれたと思ったかもしれない。でも、神のみわざは完璧なのです。蒔かれた種が無駄になることは絶対にありません。最も良いときに、最も良い形で実を結んでいきます。

イエスは誰のところに來られたのでしょうか。悪霊につかれたひとりの男のところへ來られました。では、その地方には他に苦しむ人たちはいなかったのでしょうか。救われるべきたましいは他にいなかったのでしょうか。そんなことはない。そこには苦しむ人たちがこの男の他にもたくさんいたのです。そして、苦しんでいたのは本人だけではない。その家族も当然苦しむ。まわりに住んでいる人たちも苦しむ。いろいろな意味で人々は苦しんでいた。

イエスの目にはそれが見えています。なんとかしなければと心を砕きます。救うためならなんでもしようとします。人々が、イエスのところに来ることができるように、そのた

めにはあえてご自分が恨まれるようなこと  
さえします。

すべてが終わった後、イエスは舟に乗って  
帰って行かれます。がっかりしながら帰った  
ではありません。救いのみわざが完全に行  
われたことに満足して帰って行かれます。

私たちは、家族や友人の救いのことを祈っ  
ております。すぐに救われないように思えて  
落胆するときがあります。あせることはあり  
ません。私たちの目には、イエスのみことば  
力がないかのように見えるときありますが、  
そうではありません。神のみことばの種  
は私たちを通して蒔かれていきます。蒔かれ  
た種は、最も良いときに芽を出し、実を結ば  
せていく。私たちがするのではない。神がし  
てくださいます。

この方に安心してゆだねたいと思います。